

## 中田 瑞穂 先生

とよ 倉 康 夫  
(東京大学名誉教授)

中田瑞穂先生の生誕百年を記念して先生を偲ぶ集いにお招きをいただき、出席することができましたことを無上の光栄に存じます。そして、このすばらしい会の準備のために払われた発起人の皆様の大変なご努力に対し、心からの敬意と感謝を申し上げたいと思います。

中田先生と学問、中田先生と俳句、中田先生と水彩画、そして何よりも中田先生と新潟、これらすべてが百年後の今も私どもの心の中に脈々とうけつがれ、生きつづけているというのは驚くべきことだと思います。

私は昔からどうもこの百年目とか、百年後というのが好きでありまして、私事にわたりますが東大に神経内科ができましたときも、「あせらず、脊のびせず、百年後のために」と書いて教室のモットーにした記憶がございます。中田瑞穂先生のご生誕の年、1893年と申しますと、あたかも神経学の祖 J.-M. Charcot が偉大な業績をのこして亡くなった年、その3年後には門弟の一人 Babinski が有名な足ゆび徴候を発表したということです。Charcot はまた、すぐれた芸術的才能の持主でもあり、彼の描いた多くの画のデッサンが残っております。そういうこともあって、Nouvelle Iconographie de la Salpêtrière という雑誌を創刊したことも有名な話です。そんなわけで、中田先生はまさに Charcot の生まれ変わりとして神経学にも、絵画にも非凡な作品を残された方だと申せるのではないかと思います。申すまでもなく中田先生はわが国脳神経外科学の先駆者であられたのでありますが、神経学の領域でも「癲癇 2000年」、「脳と心」や「バビンスキー反射」などについても驚歎すべき論文を書かれるという、類い稀な神経学者であられたと思うのであります。

どういふご縁からであったか定かには覚えておりませんが、当時まだ若輩の私ごとき者にも、次々にお書きになった論文の別刷を送って下さいました。ところが、そのどれもこれも余程腰をすえて勉強してからでないと思ひこなせるようなものではございませんで、御禮のご返事を出すのが一苦勞でした。したがいまして、こちらから自分の別刷を先生に差し上げるような気持には到底なれなかったのでありますが、ただ一回だけ例外がございます。

それは偶々植木幸明先生から教えられ、生田房弘先生

からそのコピーを送っていただいた中田瑞穂先生の論文(私自身の体験した一延髄発症の観察手記。新潟医学会雑誌 67: 797-816, 1953)について私自身の考察を述べた論文(神経内科 2: 75-86, 1975)のことでございます。発表にあたって中田先生には事前にまったくお断りすることなく、文中にも先生のことを「中田」で通す冷徹な拙著ではありましたが、先生は少しも怒られることもなく喜んで下さいました。先生は論文の中で、ご自分の延髄背外側の仔細きわまる病変推定図まで自らの筆で描いておられますが、これがあの脳から延髄・脊髄・馬尾に至るまで切れ目のない neuraxis の剖検をというご遺言につながるものと、標本を拝して合掌した次第でした。先生の論文別刷を今ここに持参しておりますが、とくに先生の経験された知覚異常と嚥下障害に関するご自身の臨床的考察はまさに驚歎、脱帽に値するもので、その中の二、三をご紹介したいと思います。—略—

中田先生の思い出はほかにも沢山ございますが、最近読ませていただいた生田房弘所長の Brain Medical 所載のバイオグラフィーは、師への敬慕と真情に溢れて胸を打つものがあり、もはやつけ加える何物もございません。今はただ一言、萬感をこめて「嗚呼、中田先生！」

## 中田瑞穂先生の思い出

萬 年 甫  
(東京医科歯科大学名誉教授)

只今御紹介にあずかりました萬年でございます。このような記念すべき会にお招きを受けまして誠に有り難うございました。身に余る光栄に存じます。只今は豊倉教授から中田先生についての科学的なお話でしたが、私の場合はもう少し私的な思い出でございます。

私が中田先生のお名前を最初に伺いましたのは小学校の頃であります。私の両親の出身地が山形県鶴岡であり、母方の伯父がその地で開業医をしておりました。その伯父が新潟医大出身で、大学を出てから平澤興先生のご指導のもとで脳に関して学位論文を書きました。私が夏休みなどに鶴岡に参りますと、伯父の口から新潟には平澤先生のほかにも脳の大家で中田瑞穂という偉い先生がおられるということをしばしば聞かされました。次にお名前を耳にしたのは中学の時、鶴岡在住の父方の叔父の子供すなわち私の従兄弟の一人がヘルニアで苦しんでおりましたが、ある時叔父から新潟に中田教授という偉い外科の先生がおられるのでそこに連れて行くということ

を聞かされました。従兄弟はその時手術して戴いて現在も活躍しております。3度目は私が大学生時代に俳句をかじた時であります。歳時記として用いましたのは「ほととぎす」の高濱虚子の、表紙に「花鳥諷詠」と大きく書かれているものでございましたが、そのなかで各季題の例句として挙げられているもののなかにはしばしば「みづほ」という人の句があるのに気付きました。それがいずれも自然の姿をたくみにとらえ、しかも諧謔味が豊かであるということで私は大変気に入ってしまいました。ところがこの「みづほ」が脳外科の大家「瑞穂」と同一人であるというのに気付くには私にとりまして随分時間がかかったのであります。

私が中田先生にお近付きを許されるようになりましたきっかけは、私がフランス留学から戻りましてから始めた神経学の古典翻訳の別刷が出来る度に先生にお送りしたことからであります。それに対して先生は必ず長いお手紙を下さいました。そのお手紙は鋭い批判を含みながら、若い者の心にひびく適当な褒め言葉がちりばめてあり、次の仕事への意欲をもちたてて下さるものであります。その点、先生はよい意味でのアジテーターであられたと思います。その頃の先生は現役を退かれ、先生流に言えば「瑞穂を刈上げて稽翁」と号しておられ、私が先生に初めてお目にかかったのも、新潟大医学部の古い木造の建物の中にあつた名誉教授室においてでありました。それ以後は新潟にまいる度に西大畑町の御自宅をお訪ねするようになり、冬は炬燵、夏は扇風機の風を浴びながらお話をうかがつたと記憶しております。お話は多くが絵のことであります。絵に対する御執心は大変なものでありまして、ある時こういう風に申されました。「私の絵は見たままを写す。植物の葉に虫食いがあればそのまま描くし、果実箱に穴があいておればそれもそのまま描く。私の描くのが絵であれば、世間で絵と言われているものは絵ではない。逆に世間で絵と言われているものが絵というものであるというなら、私の描くものは絵ではない。」自然をそのまま写すと言う行き方は先生の俳句のそれと完全に一致しております。笑顔でおっしゃっておいででしたが、目は爛々として自信にあふれ

ておいででした。私は現役時代の先生の厳しさをそこに垣間見たように思いました。「補」。

私が接し得たのは主として先生の60才代後半から70才代に当っておりますが、私自身も来年70才に達しようとしております。その年代に先生のお書きになった「脳と心」、「脳の Plasticity など」、「癩癩 2000 年」などを今日拝見すると、先生の勉強の深さと新しいものを理解しようとする脳の柔軟さに今更ながら驚かされるのでありまして、到底先生には及ばずとはいえ、年齢を越えていつまでも努力しなければならないということを、この会に出席させていただいて一層身にしみて感じた次第であります。

御静聴有り難うございました。

「補」(当日話が余り長くなつてもと思ひ割愛いたしました)

絵については次のようなことも伺いました。「私はこんにゃくを描き切つてみたい。こんにゃくは割れ鍋に入られて台所に置かれても、あるいは皿に盛られてパッキンガム宮殿の厚い絨毯の上に置かれても、こんにゃくはこんにゃくで一向に変わりはない。あの半透明で、押せば引っ込み、離せばブルンと元通りになるあの感じを描きたいんだ。ところが何遍描いても納得のゆくのが描けん。人に見せると豆腐かとか、ひどいのになると砥石かとか言われてしまう。ただ孫だけは、ジジ、これはこんにゃくかといつてくれたが、孫は本物のこんにゃくについては何も知らなかつたんだ」と言われて破顔一笑されたことがありました。そんな時の先生は本当に無邪気な好好翁であられました。また、ある時「君は酒が好きか」とお確かめになった上で、老酒の甕に酒好きの鄭泉の詩を揮毫されたものを下さいました。鄭泉の詩はなんとも惚けているところがよいとかねてからお話で伺つておりましたこととて、私はさらに欲を出して一度でもいから先生とともに酒席に侍りたいと念じておりました。しかし、ついに「あたためよ越後の酒もわろからず」という場面には巡り合うことは出来ませんでした。返す返すも残念なことでありました。